

二〇二一年度 大学入学共通テスト 解説 〈古典〉

第3問 古文 『栄花物語』

〔出典〕

『栄花物語』は、十一世紀の中頃から終わり頃にかけて成立したと見られる歴史物語。作者は未詳だが、正編三十巻の作者は赤染衛門、続編十巻の作者は出羽の弁とする説がある。藤原道長の栄花を中心に、宇多天皇から堀河天皇までの十五代約二百年の歴史を、様々な資料を踏まえて編年体で記しており、『源氏物語』や『紫式部日記』などからの影響も見られる。歴史的に見て同じ素材（道長の時代が中心）を扱っている『大鏡』と比べると、『大鏡』が、藤原氏繁栄の裏にある政権争奪の様子などを批判的に描く面があるのに対し、『栄花物語』は、道長一族の栄花に対する賞賛の度合いが強い。歴史物語としては、『栄花物語』以外に、『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』（まとめて四鏡と言う）を知っておきたい。

本年度、出題されたのは、道長の六男である長家の妻が死去し、葬儀が行われる中、長家をはじめとして周囲の人々が悲嘆にくれている場面である。

〔通釈〕

《本文》『栄花物語』巻第二十七「ころものたま」

大奥様「〓故人の母親」も、この方々「〓故人と縁故のあった人々」も、また繰り返して悲しみなされる。（そのご様子は）このことをさえ悲しくひどくつらいことだと言わないのであったら、一体他にどんなことが（悲しいと言えようか）と見えるほどであった。そして、亡骸を運ぶ御車の後ろに、大納言「〓斉信・故人の父親」、中納言「〓長家・故人の夫」、しかるべき（縁故の）人々が徒歩で従いなされる。（そのご様子は）言葉にするとは並一通りの言い方にしかないほどで、（とても）表現しつくすことはできない。大奥様の御車や、女房たちの車などを後に続けさせた。御供の人々などは数えきれないほどに多い。法住寺では、普段の御参詣とは似ても似つかない（悲しい）御車などの様子に、僧都の君「〓斉信の弟・故人の叔父」が、御目の前も真っ暗になって、直視し申し上げなされることもできないほどである。そして、（亡骸を）御車からかつぎ下ろして、次いで人々も（御車から）降りた。

さて、この御忌み「〓四十九日」の間は、誰もがそこ「〓法住寺」に（籠もって喪に服して）いらっしやることになっていた。山の方へぼんやりと目を

おやりになるにつけても、(木々が)いつのまにか様々に少しずつ紅葉している。(また、寂しげな)鹿の鳴く声に目覚めなさっては、さらに少し心細さがまさりなされる。宮たち「||彰子や妍子・長家の姉たち」からも(長家様へ)お気持ちを慰めるようにと御手紙が度々あるけれど、(長家様は)今はただだ(悪い)夢を見ているようにばかり思われなさって過ごしなされる。月がたいそう明るいにつけても、思い残しなされることがないほどにいろいろと物思いにふけりなされるのであった。宮中に仕える女房も、さまざまに御手紙を差し上げるけれども、(関わりが)並一通り程度の人には、「いずれ私みずから(直接に御挨拶申し上げます)」とだけ(長家様は御返事を)お書きになる。進内侍と申し上げる女房が、(次のよう)にお悔やみの歌を)差し上げた。

契りけん……||かつて(奥様と)千年先までもと誓ったであろう思いは、(悲しみであふれる)涙の水底に沈み、今頃は(共寝した寢床の)枕ばかりが(涙に)浮いて見えるほどになっていないでしょうか。

中納言殿「||長家」の御返事は、

起き臥しの…|| (日々)寝起きのたびに(いつまでも尽きることはないと)交わした愛の誓いは絶えてしまい、尽きないので枕を浮かせるほどになつた涙でありますよ。「※「つきせぬば」は「つきせぬは(尽きないのは)」の誤りとする説もある。」

また、東宮「||敦良親王・今上帝(後一条天皇)の皇太子」の若宮「||親仁親王」の御乳母である小弁(からの歌は)、

悲しさを……|| (お悲しいことでしょうか) その悲しい思いを一方ではお慰めください。誰もが結局は留まり続けることができるこの世であるはずがありますように、いいえ、そうではありません。

(長家様の)御返事は、

慰むる……|| (いまだに妻を失った悲しみに暮れ、それを)慰める方法もないので、世の中が無常であることにも思い至ることができませんよ。

(長家様は)「このようにお思いになり、おっしゃるにつけても、「なんとまあ、(こんな悲しみの中にあつてもまだ私は)ものを分別すること」「||冷静に自分の思いを述べたり返歌をしたりすること」ができるようだが、さらに数カ月、数年が経つたら、(妻を失った悲しみを)忘れるようなこともあるのではないだろうか」と、我ながら情けなくお思いにならずにはいられない。「(亡き妻は)何事につけても、どうしてこんなにも(優れているのか)と思われるほどに感じのよい人でいらつしゃつたのになあ、顔立ちをはじめとして、氣立て(もよく)、字も上手に書き、絵などがお気に入り、先頃まで熱心に、よくうつ伏せになつては描いていらつしゃつたのになあ、この夏に描いた絵を、枇杷殿「||妍子・長家の姉・先帝(三条天皇)の皇后」のもとに持つてうかがつたところ、(枇杷殿が)たいそうおもしろがりお気に入りになつて、お納めになつたが、よくぞ持つてうかがつたことであつたよ」などと、思い残しなされることのないほどにいろいろと物思いにふけりなされるままに、何事につけても(亡き奥様のことを)ただただ恋しく思い出し申し上げなされる。(奥様が)長年書き集めなされていた絵物語などは、(数年前の火事で)全て焼失してしまったが、その後、昨年から今年にかけて集めなされたものも多くあつたので、自邸に戻ったときには、それらを取り出しては見て心を慰めようと(長家様は)お思いになつた。

〔問5 引用歌（Zの歌）〕『千載和歌集』巻第九 哀傷歌（559）

誰もみな……（小弁様のおっしゃるとおり）誰も皆（この世に）留まり続けることはできませんけれども、（妻に）先立たれたばかりの今は、やはり（とても）悲しいのです。

〔解説〕

問1 語句解釈の問題

重要単語・重要文法を確認し、必要に応じて前後の文意も踏まえて解答したい。

(ア) 標準

「えまねびやらず」の解釈として最も適当なものを選べ。

「え／まねびやら／ず」と単語分けされる。

「え」は、打消表現（ここでは打消の助動詞「ず」と呼応して、不可能（～できない）を示す副詞。これが正しいのは、①・④・⑤で、許容範囲に入るのが③の「ししようがない」。「まねび」は、「まねる・学ぶ」の意も表すが、「見聞きしたことを（まねるかのよう）にそのまま伝える」の意も表す、バ行四段活用動詞「まねぶ」の連用形。④の「表現し」は、ここでは「葬送の悲しい様子をそのまま読者に伝える」の意ととれるから、「まねぶ」の意と言える。よって、「まねび」の訳が正しいのは、③・④。「やら」は、元来、ラ行四段活用「やる（遣る）」の未然形で、「（あちらへ）やる（遠くへ）送る」の意である。現在でも「これ君にやるよ」「これはそっちへやれ」などと使う語だが、この「まねびやら」のように古文で他の動詞について補助動詞として使われている場合は、「遠くへくする」、または「十分くしきる」の意を示す。この補助動詞の意味合いが訳出されているのは、④の「しつづくす」（十分くしきる）だけである。以上から、全ての要素が訳出されているのは④である。

「え／ず」の呼応も大事だが、④の「表現し」が「まねび」の訳であると分かるかどうかは正解を得るポイントとなるだろう。よって、正解は④である。

正解 22 ④ (5点)

(イ) 基礎

「めやすくおはせしものを」の解釈として最も適当なものを選べ。

「めやすく／おはせし／ものを」と単語分けされる。

「めやすく」は、形容詞「めやすし」の連用形。「めやすし」は「目安し」の字が当たり、「(見た目の)感じがよい・見苦しくない」と訳す。これが正しいのは③のみである。許容範囲に入るのが④だが、「すぐれた」というほどの意味があるわけではない。「おはせ」は、「いらっしゃる」と訳す尊敬の動詞(サ行変格活用)。「おはす」の未然形。これが正しいのは②と③で、許容範囲に入るのが尊敬の意を訳出している⑤である。以上から、いずれの語も正しく訳されているのは③である。なお、「し」は過去(した)の助動詞「き」の連体形、「ものを」は「しものになあ」と訳す終助詞であるが、これらはいずれの選択肢も正しく訳されている。よって、正解は③である。

正解 23 ③ (5点)

(ウ) 基礎

「里に出でなば」の解釈として最も適当なものを選べ。

「里／に／出で／なば」と単語分けされる。

「里」は、「人里」の意もあるが、「自宅・実家」の意を示すことが重要な名詞。「里」だけで「山里」(③)・「故郷」(⑤)の意を示す例は多くなく、宮中に住まう人が「実家・自宅」を指して言うことが多い。よって、これが正しいのは①・④である。なお、「実家・自宅」のことは「ふるさと」と言うこともあるが、「ふるさと」であれば「かつて都があった場所(旧都)・かつて慣れ親しんだ(住んでいた・通い慣れていた・生まれ育った)場所」といった意味も表すので、②の「旧都」や⑤の「故郷」の可能性もあることになる。ここでは法住寺に籠もって喪に服している長家が「出で」る場所が「里」であるから、①か④と考えるのがよい。「な」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形。「ば」は、未然形に接続している場合は、仮定条件(もしくならば)を表す接続助詞である。はっきりと仮定条件と分かる訳し方をしている選択肢はないが、「したときには」(①)と「した日には」(②)は「もしくしたら、そのとき(日)には」の意ととれるので、これらが正しい。③と④の「しので」は、「ば」が已然形に接続している場

合（確定条件）の訳し方であるから正しくなく、⑤の「〜するとすぐに」は「ば」の訳し方がない。以上から、全ての要素が正しく訳されているのは①である。

「里」の意味と「ば」の用法が分かれば正解できる。

よって、正解は①である。

正解 24 ① (5点)

問2 理由説明問題 応用

傍線部A「『今みづから』とばかり書かせたまふ」とあるが、長家がそのような対応をしたのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを選べ。

「今みづから」の意味は、「今すぐに自ら返事をします」という意味ではない。この「今」は「今に・そのうちに・いずれ」の意で、「今みづから」は、「いずれ私みずから直接に御挨拶申し上げます」という意味である。つまり、傍線部「『今みづから』とばかり書かせたまふ」は、「『いずれ私みずから（直接に御挨拶申し上げます）』とだけ（長家様は御返事を）お書きになる」という意味で、丁寧な対応をしなかったということなのであるが、これは、傍線部直前に「よろしきほど」とあるように、「よろしきほど」の人に対する対応である。

「よろしき」は、形容詞「よろし」の連体形で、「適当だ・ふさわしい・優れている」などプラスのイメージも示すが、「まあまあだ・ふつうだ・並一通りだ」の意でも使われる語である。ここで気がつきたいのが、「並一通りの関わりしかない人からのおくやみの手紙に対して」(①)、「妻と仲がよかった女房たちには」(②)、「心のこもったおくやみの手紙に対しては」(③)、「大切な相手からのおくやみの手紙に対しては」(⑤)と、多くの選択肢で長家が傍線部にあるような対応をした対象（相手）が書かれていることである。②・③・⑤にあるような対象も「よろしき」のプラスイメージからすれば間違っていないように見えるが、それならば長家が『今みづから（いずれ私みずから）』とだけ返事を書いて済ませたというのはおかしい。一方、「並一通りの関わりしかない人」(①)は、「よろしき」の「まあまあだ・ふつうだ・並一通りだ」の意にならなくて、このような対象ならば、長家が『今みづから』とだけ返事を書いて済ませた対象として納得がいくことになる。なお、④は、そのような内容が本文に書かれていないので正解にならない。

よって、正解は①となる。「今」「ばかり」の意に注意して傍線部の意味を理解し、「よろしき」の意に注意して直前の「よろしきほどは」の意味を理解することで正解は得られる。

正解 25 ① (7点)

問3 傍線部の語句・表現・文法に関する説明問題 応用

傍線部B「よくぞもてまゐりにけるなど、思し残すことなきままに、よろづにつけて恋しくのみ思ひ出できこえさせたまふ」の語句や表現に関する説明として最も適当なものを選べ。

傍線部は「よくぞ持つてうかがったことであつたよなどと、思い残しなさることがないほどにいろいろと物思いにふけりなさるままに、何事につけても(亡き奥様のことを)ただただ恋しく思い出し申し上げなさる」という意味である。

少し前にある傍線部I「めやすくおはせしものを」についての問一の選択肢を見ると、いずれも「ものを」は「くのになあ」となっていて、長家が直接的に心情を吐露していることがわかるが、これと同じ表現は少し後の「うつ伏しうつ伏して描きたまひしものを」(よくうつ伏せになつては描いていらつしたのになあ)にもあり、この辺りが「」は付いていないものの、長家の心中会話であることが見て取れる。そう考えて、この前後を見ると、その内容や表現から見ても、傍線部Iの直前の「何ごとにもいかでかくと」から、傍線部Bの「よくぞもてまゐりにける」までが「亡き妻は(もよく)、字も上手に書き、絵などがお気に入り、最近まで熱心に、よくうつ伏せになつては描いていらつしたのになあ、この夏に描いた絵を、枇杷殿のもとに持つてうかがったところ、(枇杷殿が)たいそうおもしろがりお気に入りになつて、お納めになつたが、よくぞ持つてうかがったことであつたよ」という意味の心中会話であることが分かる。傍線部の「など、思し残すことなき」の「など」は、その直前までが会話や心中会話であることを示す語であるから、その点から見ても心中会話の範囲は、今見たとおりである。

このことを踏まえて傍線部を見ると、「よくぞもてまゐりにける」は、少し前の「この夏の絵を、枇杷殿にもてまゐりたりしかば」のことを言っているものであり、会話文(心中会話)中の「けり」は詠嘆であることが多いから、「よくぞ絵を枇杷殿のもとへ持つてうかがったことであつたなあ」という意味であることになる。よって、①の説明は正しい。

続く「思し残すことなき」は、雰囲気からだけ見ると、②が言うように、「妻とともに過ごした日々後悔はない」と言っているかのように見えるが、これは、右にあげた長い心中会話を受けて、「このように、何もかも残すことなく思ひ出さないことがないほどに、いろいろと物思いにふける」という意味である。そもそも長家はここで妻の死を悲しみ、悲嘆に暮れているわけで、「後悔はない」というようなさっぱりとした気分であるわけではない。よって、②の説明は正しくない。

この「思し残すことなき」の意が理解できれば、「思し残すことなきままに、よろづにつけて恋しくのみ思ひ出で」が、「思ひ残しなさることがないほどにいろいろと物思いにふけりなさるままに、何事につけてもただただ恋しく思ひ出し」の意であることも分かるだろう。「ままに」は、「するにつれて・するにしたがって」「にまかせて」「のとおり」「ので」「するやいなや」などの意味であり、③が説明する「それでもやはり」という意味ではない。また、本文全体から見ても、長家はひたすら悲嘆に暮れており、「妻の死を受け入れたつもり」など微塵もない。よって、③の説明は正しくない。

「よろづ(万)」は、「何ごとにつけても・万事」の意で、「よろづにつけて恋しくのみ思ひ出で」は、右でも見たように、「何事につけてもただただ(亡き妻を)恋しく思ひ出し」という意味である。よって、「よろづにつけて」を、「妻の描いた絵物語のすべてが焼失してしまった事に対する」と説明している④は正しくない。

傍線部最後の「思ひ出できこえさせたまふ」は、「思ひ出で／きこえ／させ／たまふ」と単語分けされ、「(長家様は亡き奥様のことを)ただただ恋しく思ひ出し申し上げなさる」と訳される。主体である長家に対する敬語の使われ方を見ると、「月のいみじう明きにも、思し残させたまふことなし(第二段落)」、「今みづから」とばかり書かせたまふ(傍線部A)など、尊敬の助動詞「す」「せ」は連用形)と尊敬の補助動詞「たまふ」の組み合わせによる最高敬語(二重尊敬)が使われているから、傍線部の「思ひ出できこえさせたまふ」も「させたまふ」は、尊敬の助動詞「さす」の連用形「させ」と尊敬の補助動詞「たまふ」による最高敬語(二重尊敬)であると考えるべきである。また、内容から見ても、ここは長家が妻を思ひ出すという意味であるから、「させ」を使役とし、「懐かしんでほしいと、長家が枇杷殿に強く訴えている」という内容だとする⑤の説明は正しくない。

以上から、正解は①である。

正解 ① (6点)

26

問4 登場人物に関する説明問題 標準

この文章の登場人物についての説明として最も適当なものを選べ。

登場人物が多いので、この形式で問うているが、要は内容合致問題である。同形式は2017年度センター試験で出題されたことがある。

①は、「『大北の方』だけは冷静さを保って人々に指示を与えていた」が誤り。「大北の方」については、本文一～二行目に、「おしかへし臥しまるばせたまふ（＝繰り返し返し倒れ転げるようにして悲しみなさる）」、「北の方の御車や、女房たちの車などひき続けたり（＝大奥様の御車や、女房たちの車などを後に続けさせた）」（本文二行目）とあるだけで、①に書かれているような内容は本文にはない。

②は、「氣丈に振る舞い」が本文になく、「亡骸を車から降ろした」が本文からは不明である。本文四行目に、「僧都の君、御目もくれて、え見たてまつりたまはず（＝僧都の君が、御目の前も真つ暗になって、直視し申し上げなされることもできないほどである）」とあるので、②の前半の説明はほぼ正しい（厳密には「涙があふれ」「亡骸を」は書かれていない）が、「氣丈に振る舞い」に相当する表現は本文にはない。また、その直後に、「御車かきおろして（＝亡骸を御車からかき下ろして）」とあるが、「え見たてまつりたまはず」で「僧都の君」に使われている尊敬語がここにはなく、亡骸を降ろした人々の中に「僧都の君」が含まれていたかどうかは判然としない。

③は、「妻を亡くしたことが夢であつてくれればよいと思つていた」が本文には書かれていない。③の前半の内容は、第二段落一行目の、「山の方をながめやらせたまふにつけても、わざとならず色々にすこしうつろひたり。鹿の鳴く音に御目もさめて（＝山の方へほんやりと目をおやりになるにつけても、木々がいつのまにか様々に少しづつ紅葉している。寂しげな鹿の鳴く声に目覚めなさつては）」に相当すると言えるが、この続きは、「今すこし心細さまさりたまふ（＝さらに少し心細さがまさりなさる）」であり、この時に「妻を亡くしたことが夢であつてくれればよい」と思つたとは書かれていない。少し後に、「ただ今はただ夢を見たらんやうにのみ思されて（＝今はただただ悪い夢を見ているようにばかり思われなさつて）」とはあるが、これは「宮々」から「思し慰むべき御消息（＝気持ち慰めるようにとの御手紙）」があつた時の気持ちとして説明されていることであつて、「秋の終わりの寂しい風景を目にする」時の感興として説明されていることではない。また、「今はただただ悪い夢を見ているようにばかり思われる」は、悲しみのあまり呆然としている状態を言っているものであつて、③にある「妻を亡くしたことが夢であつてくれればよい」というのとは厳密には意味が違っている。

④は、「自分も枕が浮くほど涙を流している」が正しくない。「進内侍」の「契りけん」の歌は、「かつて（奥様と）千年先までもと誓つたであろう思ひは、（悲しみであふれる）涙の水底に沈み、（共寝した寢床の）枕ばかりが浮いて見えるほどでしょうね」という意味である。「見ゆらん」の「ら

## 問5 和歌に関する説明問題 応用

「ん」は、基本的に「今頃はくしているだろう」と訳す現在推量（視界外現在推量）の助動詞であるから、ここでは、歌の詠み手である「進内侍」が、自分からは見えていないことを、「今頃は枕ばかりが浮いて見えるほどになっているのではないでしょうか」と推量しているのである。つまり、長家が涙を流していることを推量しているものであり、「自分も枕が浮くほど涙を流している」と言っているわけではない。

⑤は、最終段落の二～三行目に書かれている、「顔かたちよりはじめ、心ざま、手うち書き、絵などの心に入り、さいつころまで御心に入りて、うつ伏しうつ伏して描きたまひし」に相当して誤りはない。「かたち」は「容貌・顔立ち」の意。「心ざま」は「心の様子・気立て・性格」の意。「手」は「文字・筆跡」の意。「心に入る」は「気に入る・興味を持つ・熱中する」の意。「さいつころ」は「先頃」の意である。この箇所は、問3で見たとように、長家の心中会話で、亡き妻を思い出して、「何（なに）ことにもいかでかくとめやすくおはせしものを（＝何事につけても、どうしてこんなにも優れているのかと思われるほどに感じのよい人でいらっしやったのになあ）」と始め、妻の色々な点について賞賛を続けている箇所であるから、「顔かたちよりはじめ、心ざま、手うち書き」というのは、明記されていないが「顔かたち・心ざま・手」が素晴らしいことを言っているのである。そして、「絵」に興味を持って、先頃まで熱心に描いていたというのであるから、⑤の説明は正しい。

以上から、正解は⑤である。

正解 27 ⑤ (6点)

次に示す【文章】を読み、その内容を踏まえて、X・Y・Zの三首の和歌についての説明として最も適当なものを、二つ選べ。

共通テストに先立って発表・実施されたモデル問題や試行調査（プレテスト）では、古文の本文が複数ある、または、古文の本文は一つだが、問5に複数の人間による会話文があり、その中に本文に関連する古文や和歌が引用されている、といった形式での出題があり、これらはセンター試験にはない新しい出題形式であった。

今回の大学入学共通テスト本試験（一回目）では、古文の本文は一つで、会話形式もなかったが、問5に短い和歌の説明文（現代文）が組み込まれ、その中に本文に関連する和歌が引用されて出題された。その出題形式は、モデル問題や試行調査にもなかった新形式と言えるが、要は、本文中の和歌と問5に引用された和歌、合わせて三首の和歌の解釈の問題である。複数の和歌の解釈問題はセンター試験でもたびたび出題されたものであるから、

短い説明文が組み込まれているとは言え、その内容はセンター試験の和歌の問題とさほど変わらないものであると言える。

X・Y・Zの三首の和歌は次のように解釈される。

X 悲しさを……(お悲しいことでしょうか) その悲しい思いを一方ではお慰めください。誰もが結局は留まり続けることができるこの世であるはずが、ありましようか、いいえ、そうではありませんまい。

※「かつは」は、「一方では」の意。「べき」は、可能(～できる)の助動詞「べし」の連体形。「か」は、反語(～か、いいや、～ない)の係助詞の文末用法である。

Y 慰むる……(いまだに妻を失った悲しみに暮れ、それを)慰める方法もないので、世の中が無常であることにも思い至ることができませんよ。

※「方」は、「方法」の意。「し」は、訳に反映しなくてもよい強意の副助詞。「なけれ」は、形容詞「なし」の已然形。「ば」は、已然形に接続して確定条件(～ので・～と・～ところ)を示す接続助詞。「常なきこと」は、「無常」の意。「無常」とは、本来「万物が常に変化し、同じであり続けることがないこと」の意だが、多くは「命のはかなさ」を言う言葉である。「れ」は、可能(～できる)の助動詞「る」の未然形。「ざり」は、打消の助動詞「ず」の連用形。「けり」は、詠嘆(～なあ)の助動詞の終止形である。

Z 誰もみな……(小弁様のおっしゃるとおり)誰も皆(この世に)留まり続けることはできませんけれども、(妻に)先立たれたばかりの今は、やはり(とても)悲しいのです。

※「べき」は、可能(～できる)の助動詞「べし」の連体形。「に」は、断定の助動詞「なり」の連用形。「ね」は、打消の助動詞「ず」の已然形。「後るる」は、「遅れる・劣る」の意もあるが、「先立たれる」の意が問われやすい動詞「後る(おくる)」の連体形。「ほど」は、さまざまな「程度」「身分」などの意を示すが、「時・頃・間」などと訳することが多い名詞。「なほ」は、「やはり・さらに」の意の副詞。「ぞ」は、強意(訳に反映しなくてもよい)の係助詞である。

和歌Xで「小弁」が「命ははかない者なのだから、そう考えて悲しみを慰めよ」と詠んだのに対して、長家は、和歌Yでは「悲しみが深すぎて、人の世の無常にまで思い至ることができない」、和歌Zでは「人の世の無常は分かっているけれど、現実の死を目の前になるとやはり悲しい」と詠んでいることになる。

和歌Xについての説明を見ると、②の「世の中は無常で誰も永遠に生きることができないということ詠んでいる」、③の「誰でもいつかは必ず死ぬ身なのだからと言って長家を慰めようとしている」、④の「励まし」、⑤の「長家を励まそうとした和歌」は、右で見た歌意に合致して説明

に間違いがないが、①の「長家の悲しみを深くは理解していない、ありきたりなくやみの歌」、「悲しみをきっぱり忘れなさい」と安易に言ってしまう」「誠意のなさが露呈してしまっている」は、正しいとは言えない。

問2で見たように、そもそも長家は、「よろしきほど（＝並一通りの関わりしかない人）」には「今みづから（＝いずれ私みづから直接に御挨拶申し上げます）」とだけ返事をして済ませている。そのような中、和歌のやりとりをしている「小弁」が長家の悲しみを理解していない、誠意のない人であるはずはなく、また、ありきたりな挨拶の歌を送ってきたとも考えられない。また、「小弁」は「悲しみをきっぱり忘れなさい」と安易に言っているのではなく、「かつは（一方では）」とあるので、「悲しむのは分かるが、その一方で、悲しんでばかりいるのでなく、悲しみを慰めください」と言っているのである。長家の悲しみについて理解した上で、「いつまでも悲しんでばかりいらっしやるな」と慰めているのである。よって、①は正解にならない。

和歌Yについての説明を見ると、⑤の「私の心を癒やすことのできる人などいないと反発した歌」は、さきに見た歌意と合致せず、説明が正しくない。また、⑤は、後半の、「長家が他人の干渉をわずらわしく思い」も、和歌や和歌に続く本文から読み取れない。さらに、長家はひたすら亡き妻のことを思い出しているとは言えるが、⑤の「思い出の世界にとじこもってゆく」は言い過ぎである。よって、⑤は正解にならない。

また、⑥の「世の無常のことなど今は考えられないと詠んだ歌」は、さきに見た歌意と合致して、説明が正しい。⑥は、中盤以降の、「そう詠んだことであえてこの世の無常を意識してしまった長家が、いつかは妻への思いも薄れてゆくのではないかと恐れ」も、和歌の後の、「かやうに思しのためはせても、いでや、もののおぼゆるにこそあめれ、まして月ごろ、年ごろにもならば、思ひ忘るるやうもやあらんと、われながら心憂く思さる」、つまり、「このようにお思いになり、おっしゃるにつけても、『なんとまあ、（こんな悲しみの中にあってもまだ私は）ものを分別することができるようだが、さらに数ヶ月、数年が経ったら、（妻を失った悲しみを）忘れるようなこともあるのではないだろうか』と、我ながら情けなくお思いにならずにはいられない」に相当して正しい。また、最後の「妻を深く追慕してゆく景気となっている」も、続く「なに「ことにもいかでかくよくぞもてまゐりにけるなど、思し残すことなきままに、よろづにつけて恋しくのみ思ひ出できこえさせたまふ」（通釈や問3の解説を参照）という長家の様子に合致していて、説明に誤りがない。よって、⑥は正解となる。

また、④の和歌Yについての説明は、和歌Xと「同じ言葉」を用いていないという説明は正しいが、「和歌Xの励ましを拒む姿勢を表明している」という説明は、言い過ぎの感がある。和歌Yが表しているのは、「今は悲しすぎて、この世の無常にまでは思いが至らない」という状況の説明であり、「励ましを拒む姿勢」とまでは言えない。よって、④は正解にはなりそうにない。

和歌Zについての説明を見ると、②の「その内容『世の無常を説く和歌Xの内容』をあえて肯定することで、妻に先立たれてしまった悲しみをなんとか慰めようとしている」は、さきに見た歌意と合致せず、説明が正しくない。和歌Zは、和歌Xの内容を「あえて『取り立てて、わざわざ』

肯定」しているわけではなく、「悲しみをなんとか慰めよう」とも言っていないのである。よって、②は正解にならない。

和歌Zの、「誰も皆とまるべきにはあらねども」は、「確かに小弁様「Ⅱ和歌X」の言うとおり、この世は無常であり、命はかないものではある、しかしそうは言っても」という意味である。よって、これについては③の「ひとまずそれ「Ⅱ世の無常を説く和歌Xの内容」に同意したうえで」という説明が正しい。また、和歌Zの、「後るるほどはなほぞ悲しき」は「実際、妻に先立たれた今はやはり悲しい」という意味であるから、これも③の「それでも妻を亡くした今は悲しくてならないと訴えている」という説明が正しい。よって、③は正解となる。

また、④の和歌Zについての説明は、和歌Xと「同じ言葉」を用いているという説明は正しいが、「(小弁が) 悲しみを癒やしてくれたことへの感謝を表現している」という説明は、さきに見た歌意と合致せず、正しくない。よって、④は、和歌Yに関しても正解にはなりそうになかったが、和歌Zに関する説明を見ると正解にならないことがはっきりする。

以上から、正解は③と⑥である。

正解 28・29 ③・⑥ (順不同) (各8点)

第4問 漢文 『歐陽文忠公集』 『韓非子』

〔出典〕

〔問題文Ⅰ〕は、北宋の時代の政治家、学者、唐宋八大家として文章家としても著名な欧陽脩（一〇〇七～一〇七二年）の『歐陽文忠公集』中の、「有馬示徐無黨」という五言古詩。「文忠」は諡（おくりな）である。

〔問題文Ⅱ〕は、戦国時代末期の、法家の思想家韓非（？～前二三三年）の著『韓非子』の〈喻老第二十二〉の一節。『韓非子』は、韓非子自身の著といふより、実際には後世付加された部分が多い。唐代までは「韓子」と称したが、韓愈を韓子としたのと区別するために韓非子と称されるようになった。孔子・孟子などの儒家の徳治主義を排し、法律・刑罰を絶対化した、「法治主義」「富国強兵」「中央集権」の政治思想は、秦の始皇帝の天下統一に大きな影響を与えた。

〔書き下し文〕

〔問題文Ⅰ〕

吾に千里の馬有り

疾く馳すれば奔風のごとく

徐ろに駆れば大道に当たり

馬に四足有りと雖も

六轡は吾が手に応じ

東西と南北と

惟だ意の適かんと欲する所にして

至れるかな人と馬と

伯楽は其の外を識るも

王良は其の性を得たり

良馬は善馭を須つ

毛骨何ぞ蕭森たる

白日に陰を留むる無し

歩驟は五音に中たる

遲速は吾が心に在り

調和すること瑟琴のごとし

山と林とを高下す

九州周く尋ぬべし

両楽相侵さず

徒だ価の千金なるを知る

此の術固より已に深し

吾が言箴と為すべし

【問題文Ⅱ】

凡そ御の貴ぶ所は、馬体車に安んじ、人心馬に調ひ、而る後に以て進むこと速やかにして遠きを致すべし。今君後るれば則ち臣に速ばんと欲し、先んずれば則ち臣に速ばれんことを恐る。夫れ道に誘めて遠きを争ふは、先んずるに非ざれば則ち後るるなり。而して先後の心は臣に在り。尚ほ何を以て馬に調はん。此れ君の後るる所以なり。

【通釈】

【問題文Ⅰ】

私には一日に千里を走る駿馬があり、その毛並みや骨格のなんとひきしまつて美しいことだ。速く走らせれば疾風のように、陽光のもとでも陰をとどめるとまもない。

ゆつくりと走らせれば大路に出会い、その駆ける足音は五音の音階にかなっている。

馬に四足があつて走るのが、その走りの速い遅いは私の心のままで。

手綱は私の手に呼応して、大小の琴の音を合わせるように動く。

東へ西へ、南へ北へ、山に林にと、どんなところにも行く。

ただ私の思うがままに行き、中国のどこへでも行くことができる。

人と馬とはこのような境地にまで到達することができるものなのか、一体となつてともに侵し合うことがない。

あの伯樂はその馬の外貌によって馬を見分けたが、ただその馬の価値の千金であることを理解しただけだ。

しかし、王良は馬の本性を理解した、その御術はいうまでもなくはなはだ深遠なものであった。

良馬はすぐれた御者を必要とする。私のこの言をいましめとしてもらいたい。

【問題文Ⅱ】

総じて御術にとって大切なのは、馬の体が（つながれる）車にしっかりと合ひ、御する側の乗り手の心が馬（の気持ち）にそろうことで、そうなるのはじめて速く走ること遠くまで行くこともできるのです。（ところが）今、わが君は私よりおくれると私に追いつこうと焦り、先行すればしたで私に追いつかれるのではないかと恐れておいでです。そもそも馬を道に引き出して長い距離を競走させるからには、先になつたり後になつたりするのは当然のことです。

す。なのに（わが君は）先になるかおくれるかと、私のことばかり気にして（馬のことは忘れて）おられる。それではどうして馬と気がそろいましょうか。これがわが君が私に負けられた理由でございます。

〔解説〕

問1 語の意味と、同義の漢字を判断する問題

- (ア) 基礎 (イ) 基礎

波線部(ア)「徒」・(イ)「固」のここでの意味と、最も近い意味を持つ漢字はどれか。次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)「徒」は、「たダ」で、選択肢①の「只」や、「唯・惟・但・直・特・祇・止」などと同じ。「いたづラニ（＝むなしく。むだに）」と読んでも「ただ…だけだ」と、「たダ」と読んだときと同じ意で用いることもあるが、選択肢に、「いたづラニ」の読み方で用いる語がないので、やはり、正解は①「只」である。

②「復」は「また」、③「当」は再読文字「まさニ…ベシ」、動詞「あツ・あタル」など。④「好」は「このミテ」その他用法が多い。⑤「猶」は「なホ…(よしとシ)」。

(イ)「固」は、「もとヨリ」で、選択肢⑤の「本」や、「素・原・故」なども同じ。「もともと。もとから。元来」の意と、「言うまでもなく。無論。勿論」の意とがある。正解は⑤「本」。

「強固」や「かたシ」にひびばられて、①「強」、②「難」に行かないようにしたい。③「必」は「かならず」、④「絶」は「たエテ」など。

正解 (ア) ③ (イ) ⑤ (各4点)

問2 語(句)の解釈の問題

- (1) 標準 (2) 標準 (3) 応用

波線部(1)「何」・(2)「周」・(3)「至哉」のここでの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(1)「何」は、言うまでもなく「なんゾ」であるが、ここは、「なんゾ…連体形」で、疑問ではなく、詠嘆の形である点がポイント。「何(なんゾ)」は、三つのパターンがある。

何…連体形(乎)

読 なんゾ…スル(や)

訳 どうして…(する)のか

〔疑問〕

何…未然形(乎)

読 なんゾ…セン(や)

訳 どうして…(する)だろうか、いやしない。

〔反語〕

何…連体形(乎)

読 なんゾ…スル(や)

訳 なんと…なことよ

〔詠嘆〕

疑問の場合と詠嘆の場合の読み方は同じであるから、どちらになるかは文脈によって判断する。ここは、自分の有している「千里の馬」の毛並みや骨格が、「何ぞ蕭森たる(『なんとひきしまつて美しいことよ!』)と言っているのであって、「どうしてひきしまつて美しいのか」と尋ねているのではない。正解は⑤「なんと」。

(2) 「周」は、「あまねく」(『通・普』)と読めるかどうかの問題である。「周知(あまねく知る。あまねく知らせる)」「周到(あまねく行きとどいてること)」「などの熟語の用法がそれにあたり、「ゆきとどく。ゆきわたる。手落ちがない」の意。ここは、「九州(中国全土)」を、「周く尋ねべし(あまねく尋ねることができるといふことであるから、正解は③「あらゆるところに」。

(3) 「至哉」は、「哉」が、詠嘆の「かな」であることが大事であるが、選択肢は、詠嘆のようにも、「哉」は疑問・反語の「や・か」とも用いるから、疑問や反語のようにもなっていて、その部分では判別しにくい。「至れるかな」が、文脈上どのようなことを言っているかである。ちなみに、「かな」は、「夫・矣・与・乎」なども同じ。

ここでは、「人と馬と、両楽相侵さず」と、まさに「人馬一体」となっている境地を「至れるかな」と言っている。①のように「あのような遠くまで」とか、③のように「あのような高い山まで」とか、⑤のように「こんなにも速く走ることができる」とかいうことを言っているのではない。また、②のように、馬の側が「人の気持ちを理解できる」だけを言っているのではない。「人」も「馬」も、でなくてはならない。よって、正解は④「このような境地にまで到達できるものなのか」。

正解 (1)  32 (2)  33 (3)  34 (4)  (各5点)

問3 本文の主旨、および「押韻」の問題 標準

【問題文Ⅰ】の傍線部A「馬雖有<sub>レ</sub>四足」遅速在<sub>レ</sub>吾<sub>レ</sub>【X】は「御術」の要点を述べている。【問題文Ⅰ】と【問題文Ⅱ】を踏まえれば、【問題文Ⅰ】の空欄【X】には【問題文Ⅱ】の二重傍線部(a)～(e)のいずれかが入る。空欄【X】に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

漢詩の偶数句末の空欄補入問題は、「押韻」の問題であることに、すぐに気づかなければならない。

この詩は、全二十二句もある、長い五言古詩であるが、偶数句末は一つの「韻」で統一されていて、このような形を「一韻到底」という。偶数句末の字を音よみしてみると、順に、「森（シン）」「陰（イン）」「音（イン・オン）」「**X**」「琴（キン）」「林（リン）」「尋（ジン）」「侵（シン）」「金（キン）」「深（シン）」「箴（シン）」で、すべて「イン（**3**）」というひびきである。

次に、選択肢に並べてある、【問題文Ⅱ】の中の二重傍線部(a)～(e)をチェックしてみると、

- ① (a) 体（タイ）
- ② (b) 心（シン）
- ③ (c) 進（シン）
- ④ (d) 先（セン）
- ⑤ (e) 臣（シン）

となり、答は、②・③・⑤の、「心」「進」「臣」のいずれかということになる。

ここからは、**X**に「心」「進」「臣」を入れてみたときの文意・文脈の判断である。馬に四足があつて、むろん走るのは馬なのであるが、速く走るか遅く走るか、手綱を持つ「吾が心に在る」のか、「吾が進に在る」のか、「吾が臣に在る」のかであるが、ここは当然、正解は②「心」でなくてはならない。「進」や「臣」では、文意がとれない。

正解 35 ② (6点)

問4 傍線部の、返り点の付け方と書き下し文の組合せの問題

傍線部B「惟意所欲適」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

この形式の問題は、センター試験時代から頻出する形式なのであるが、ポイントは、傍線部の中に、再読文字や、疑問・反語・否定・使役・受身などの何らかの句法上の読み方の特徴がないかということと、書き下し文のように読んだときの文意が通るか、また、その文意が前後の文脈にあてはまるかどうかである。返り点は、本当はそのような返り方（付け方）が文の構成上アリなのか？ ということはあるのであるが、ともかく読み方どおり返っているようにしているケースがふつうなので、返り点の付け方をチェックするのは時間の無駄である。

句法(句形)上のポイントになりそうなのは、文頭の「惟」を「たダ」と読むこと、どこかで「…ノミ」と呼応することくらいなのであるが、すべての選択肢が「ただ」と読んでおり、いずれの選択肢も「のみ」が呼応していないので、この点で判断することはできない。  
細かい点としては、「所」も「欲」も返読する用法が大事で、返り点が「所」欲適」となるのではないかということが言えるのであるが、それで④にたどりつくことを要求するのは、やや難しいかもしれない。

「適」は、①・②のように「かなフ」とも、③・④・⑤のように「ゆク」(「行・往・之・如・逝・征・徂・于」とも読む。

こうなると、各選択肢のように読んだときの文意を考え、文脈にあてはまるかどうかを考えるしかない。

①は、「ただ心が欲してかなうところであって」

②は、「ただ思うところにあてはまろうと欲して」

③は、「ただ欲するところを思つて行つて」

④は、「ただ心が行こうと欲するところであって」

⑤は、「ただ欲して行くところを思つて」

直訳型にしてみると、いずれも文脈(下の「九州周く尋ぬべし(「中国全土あらゆるところに行くことができる)」にぴったりはまりにくい。ただ、文意そのものとして、①・②・③・⑤は、傍点の部分の言わんとすることがわかりにくい。④のように、「心が行こうと欲する所」へは、自在に、中国全土へだつて行ける、ということを行っているのである。

正解 36 ④ (6点)

問5 送り仮名のない傍線部の解釈の問題 標準

傍線部C「今君後則欲<sub>レ</sub>逮<sub>レ</sub>臣、先則恐<sub>レ</sub>逮<sub>三</sub>于<sub>二</sub>臣。」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

冒頭の二文字は、「今君(「今、わが君は)」で、そのあとは対句<sub>たいく</sub>になっている。

- 後則欲<sub>レ</sub>逮<sub>レ</sub>臣
- ↔
- =
- ↔
- 先則恐<sub>レ</sub>逮<sub>三</sub>于<sub>二</sub>臣

頭の二字は、「則（…レバすなはチ）」があるから、「後るれば則ち」「先んずれば則ち」。「後れては則ち」「先だちては則ち」のように読むこともできるが、「先んずれば則ち人を制し、後るれば則ち人の制する所と為る（一人よりも先んじれば人をおさえることができ、おくれをとると人におさえられる）」という有名な例文もあるので同様に読んでおく。

「臣↓逮↓欲」は、「臣に逮ばんと欲し」。「逮」を「およぶ」と訓読みできるかどうかは、やや難といふべきであろう。「おふ（…追）」「とらふ（…捕）」とも読むが、「逮捕（…つかまえる）」という熟語で、意味の類推はできるかもしれない。「欲」は問4でもみたように、「…ントほつス」と返読する。後半へ続くので「欲し」。

「臣↓逮↓恐」は、置き字「于」のはたらきがポイント。「于」は、置き字としては「於・乎」と同じで、下にある補語（ここでは「臣」）の右下につける送り仮名「ニ・ト・ヨリ・ヨリモ・ヲ」にあたり、

- a. 動作の行われる場所・方向を示す。（二）
- b. 動作の対象を示す。（二・ヲ）
- c. 動作が継続・終止する時間を示す。（二）
- d. 動作の起点や、原因・原料を示す。（ヨリ）
- e. 比較を示す。（ヨリ・ヨリモ）
- f. 受身の対象を示す。（二）

など、多様なはたらきがある。ここは、「臣に逮ばれんことを恐る」のように、受身である。

よって、読み方は、「今君後るれば則ち臣に逮ばんと欲し、先んずれば則ち臣に逮ばれんことを恐る」となるので、直訳すると、「今、わが君は、私におくれると追いつこうと欲し、先んじると私に追いつかれることを恐れておいである」となる。つまり、正解は⑤である。

正解 37 ⑤ (6点)

問6 問題文全体の主旨を判断する問題 応用

【問題文Ⅰ】と【問題文Ⅱ】を踏まえた「御術」と御者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

【問題文Ⅰ】【問題文Ⅱ】を踏まえるのであるから、これは、要は【問題文Ⅰ・Ⅱ】と選択肢との内容合致問題である。

①は、「馬を手厚く養う」「よい馬車を選ぶことも大切」「王良のように車の手入れを入念に」など、いずれも問題文中にない。

②は、「馬の心のうちをくみとり」「馬車を遠くまで走らせることが大切」「王良のように馬の体調を考えながら鍛え」「千里の馬を育てる御者」、ほぼ全面的に問題文中にない。

③は、「すぐれた馬を選ぶ」に幾らか疑問はあるが、詩の冒頭の「吾に千里の馬有り」からの数句にある「すぐれた馬」が自分の手もとにあることの幸いに該当すると見てよいであろう。「馬と一体となって走ることも大切」が、「御術」のキモであり、【問題文Ⅰ】の詩の、第七句「馬に四足有りと雖も」から第十六句「両楽相侵さず」までの内容や、【問題文Ⅱ】の、「人心馬に調ひかな（＝乗り手の心が馬とそろう）」が合致する。「襄主のように他のことに気をとられては…」については、【問題文Ⅱ】の、「今君…」以降に述べられている部分が合致する。よって、正解は③。

④は、「馬を厳しく育て」「巧みな駆け引きを会得することが大切」「王良のように常に勝負の場を意識しながら馬を育て」るなど、ほぼ全面的に問題文中にない。

⑤は、「訓練場だけでなく、山と林を駆けまわって手綱さばきを磨く」「襄主のように型通りの練習をおこなうだけ」など、これもほぼ全面的に問題文中にない。

正解 38 ③ (9点)